

キウイフルーツかいよう病(biovar3)の影響は品種や樹齢によって異なる					
[要約]キウイフルーツかいよう病(biovar3)が発生すると、「紅妃」や「2倍体中国系黄色品種」では、キウイフルーツかいよう病菌を含む樹液の漏出や枝の枯死が多く発生する。幼木は成木よりもキウイフルーツかいよう病の影響は大きい。					
果樹試験場・病害虫研究担当			連絡先	0952-73-2275 kajushiken@pref.saga.lg.jp	
部会名	果樹	専門	果樹病害	対象	キウイフルーツ

[背景・ねらい]

佐賀県では、2014年以降キウイフルーツかいよう病 (*Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* biovar3) によるキウイフルーツの枝幹、新梢、蕾及び花等の枯死が問題となっている。そこで、品種別に病原菌を含む樹液の漏出の有無や新梢の生存率を調査し、各品種に対するキウイフルーツかいよう病の影響を明らかにする。

[成果の内容]

1. 「紅妃」や「2倍体中国系黄色品種」では、キウイフルーツかいよう病菌を含む樹液の漏出(写真1)が認められ、「ヘイワード」(成木)と比較して、主幹や主枝での症状が多い(表1)。
2. 「ヘイワード」では、キウイフルーツかいよう病菌を含む樹液の漏出は、成木では一部の樹の主枝や側枝で認められる。幼木では主幹部からの漏出が認められ、幼木は成木よりキウイフルーツかいよう病の症状は激しいと考えられる(表1)。
3. 生存新梢割合は「ヘイワード」では高く推移する。一方、「紅妃」や「2倍体中国系黄色品種」では4月中旬~6月上旬にかけて低下し、キウイフルーツかいよう病の影響は大きい(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 現地のキウイフルーツかいよう病 (*Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* biovar3) 発生圃場で調査した。
2. 生存新梢割合は、各圃場の各品種1~5樹に1つの側枝につき任意の1つの新梢(10新梢/樹)にラベルを付け、各調査時に調査開始時に生存している新梢の割合を算出した。なお、新梢部分の枯死だけでなく、新梢が発生している側枝等の枯死により生存新梢割合は低下した。

[具体的データ]

表1 品種ごとのキウイフルーツかいよう病菌を含む樹液の漏出

品種	2016年		2016年				2017年		2017年				圃場 ^{注1}
	調査樹数	調査月日	菌泥を含む樹液の漏出樹数			計	調査樹数	調査月日	菌泥を含む樹液の漏出樹数				
			主幹	主枝	側枝					主幹	主枝	側枝	計
紅妃(成木)	17	3月8日	1	6	5	12 (70.6%)	13	4月5日	1	8	2	11 (84.6%)	B
2倍体中国系黄色品種 (成木)	27	3月8日	2	5	9	16 (59.3%)	20	4月5日	1	5	10	16 (80.0%)	B
	41	3月30日	0	19	15	34 (82.9%)			__注2				
ヘイワード(成木)	3	3月29日	0	0	0	0 (0%)	3	4月5日	0	0	0	0 (0%)	A
	9	3月30日	0	1	1	2 (22.2%)			__注3				
ヘイワード(幼木) ^{注2}	120	3月29日	0	0	0	0 (0%)	120	4月5日	6	0	0	6 (5.0%)	D

主幹や主枝、側枝の複数部位で漏出が認められた場合は、主幹>主枝>側枝の順に優先し、重複しないように調査した。

注1)アルファベットが同じものは同一の圃場(現地)を示す。キウイフルーツかいよう病初確認は、A圃場は2014年6月、B圃場は2014年5月、C圃場は2015年4月、D圃場は2015年6月。

注2) 2015年植栽。2017年時点で3年生。

注3) C圃場については、2016年収穫後に伐採されたため調査なし。



写真1 キウイフルーツかいよう病菌を含む樹液の漏出

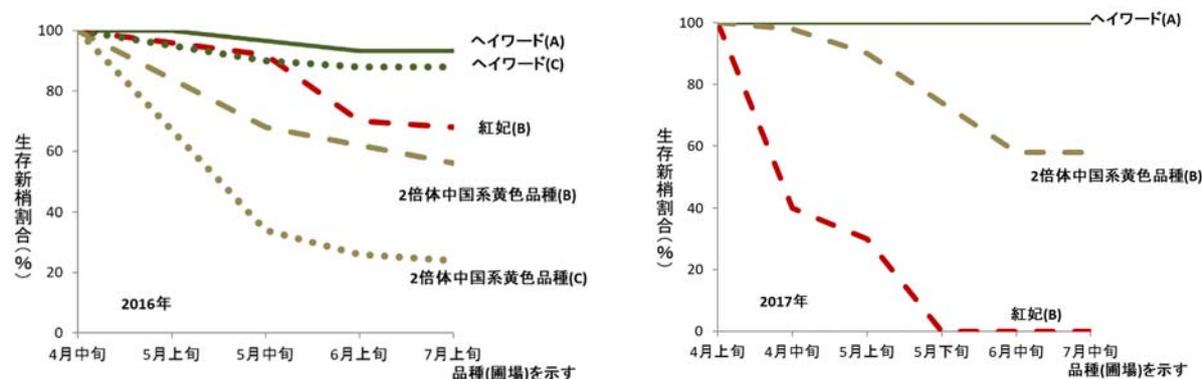


図1 キウイフルーツかいよう病発生確認後の品種ごとの生存新梢割合の推移

[その他]

研究課題名：かいよう病菌 Psa3 に対して、安心してキウイフルーツ生産を可能とする総合対策技術

予算区分：農食事業

研究期間：2016～2017年

研究担当者：野口真弓・白石祥子・口木文孝

協力・分担関係：なし

発表論文等：第92回九州病害虫研究会研究発表会(2016年秋季大会)で口頭発表

佐賀県果樹試験場研究報告 第18号(予定)